
待人

出口 常葉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

待人

【Nコード】

N1073J

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

駅前で人を待つ僕が色々と思う話。

（前書き）

ひたすらに独白形式で長々と書かれています。
途中で切ろうかとも思ったけど、それほどでもないので短編で。
生々しさとかに拘ってみました。
どうだろう。

冬。年末に程なく近い某日夕方六時半。

僕はとある地下鉄の駅に来ていた。改札口の前は広くなっていて、その真ん中にはベンチ付の柱時計がドンと置かれている。屋根はあるものの改札口以外の三方は開いていて、気温的には外と変わりない。

僕はその広場を横切り、一角にある本屋に入った。

大型書店の名前がついているので、チェーンの一軒なのだろうか、この本屋自体の品揃えはすこぶる悪い。漫画もせいぜい有名どころの新刊のみ。小説は系列で一斉にフェアでもやらない限り、やっぱり細々と新刊が入る程度だ。これじゃ大本の名前が泣くなと思うものの、とりあえずは何か時間潰しになりそうなものを買わねばならない。

いろいろと悩んだ挙句、ネットでの知り合いが紹介していた本を探してみることにした。直木賞作家とのことだったから、案外おいているかもしれない。

そうやって探すこと約十分。狭い本屋の割には時間がかかったが目当ての本を見つけることができた。分厚さ的にはやや物足りない間もあるが、まあゆっくり読めばいい。

その小説にカバーをかけてもらい、それを片手に本屋を出た僕は、柱時計にくっついているベンチにどつかと腰をかけた。

時間は六時四十分過ぎ。丁度電車の到着時間だ。

改札奥にある階段が俄かに騒がしくなる。じっと目を凝らす。どうやらメガネの度が合わなくなってきたらしいことに気づいた。参ったな、これじゃ全員を見るなんてことできやしない。

仕方なく、僕は目的の人物の行動を大雑把に思い出して見張るポイントを決めることにした。

まず彼女はこの駅のことは熟知している。通勤で、少なくとも十

年はこの地下鉄を使っているはずだ。だから階段近くのドア付近から必ず乗ると思う。けど、通勤先の駅はかなり遠い。その間に奥へ奥へと詰め込まれたら？上がってくるのは遅い……か？

後、結構合理的なところがある。改札を出た後、彼女の家に向かうには向かって左折だ。見張っている側からすれば、半分より右側の改札を使うような気がする。後は、向こうが僕に気づいたとき、きっと声をかけてくれるはずだ。こればかりは信じるしかないし、信じたい。まだ、僕と彼女の縁は完全に切れていないって信じたかった。

改札を通る無数の人々。僕はただ目を凝らし続けた。どれだけ凝らしても少しピンぼけるのがなんともじれったい。

結局、彼女は見つからなかった。

人通りが終わり、改札が静かになる。

僕はベンチに座りなおした。次の電車まで後六分。地下鉄はこのあたりの住民の生命線だから本数は多い。終電までここに座っているとすると、六十本以上の電車から降りてくる人達を見張ることになる。

バカバカしいと思う。事実、ベンチに座り込みながら、僕はいたい何をやっているんだ、という思いが頭の中を駆け巡っていた。

事の起こりは昨日に遡る。いや、起こりの話をするのであれば、もつと前か。そう彼女が僕に会ってくれなくなった二ヶ月前。

「仕事が忙しい」

と彼女は言った。僕はそのとき信じた。

それから何度か食事に誘ったが、いつも断られた。あるいはドタキャン。なんでだろう、といぶかしむ僕は間違っているだろうか。他愛ないメールには返事すら来なくなったころ、僕の心の中には疑心暗鬼のどす黒い渦が漂っていた。

そもそも、彼女の仕事が忙しいというのに僕はいまいち共振でき

なかった。もちろん、世の中にはそういう事例があるということとは頭で理解している。僕の先輩も、よくそれで愚痴めいた日記をブログに上げたりしている。

しかし、残念なことに僕自身はそういう体験をしたことがないのだ。一日や二日の残業ならともかく、何日にもわたり心の余裕をなくするような目にあつたことはない。上司一人の部下一人で会社の原材料購買を一手に担わされている部署で、僕ももう二年以上働いている。月末は多少残業することがあっても、普段は定時であがるし、それで何かしらの不便が出ることもない。

自分で体験したことでないと思ふことができないのは僕だけの損な性格なんだろうか。そのあたりについては分からないとしか言いようがない。

けど、そういう下地があつて、だからまあ先に書いた信じた、というのも信じようとしたというほうが正しい。

時計は七時を回った。まだ彼女は出てこない。靴下に張るタイプのカイロを貼り付け、服装もダウンジャケットを含めての四枚がさねをしているが、じわじわと寒さが身にしみこんでいた。見つけ損ねていて、彼女もまた見つけ損なつていたとすればすでに彼女が家に帰っている可能性もある。

あるいは別に忙しくなくて、会社を定時に出ていたとしても……。もしくは僕に気づいたけれども……。やめよう。考えたくもない。

券売機の横にある自販機でホットコーヒーを買う。飲むためというより、冷えてきた指先を暖めるための意味合いが強い。文庫本のページをめくる指先が不安定で仕方ないのだ。

どうでもいいけどこの小説、ファンタジックなタイトルの割には生々しいな。まあ、今のところ面白いからいいけど。

やがて、また階段が騒がしくなる。僕は文庫本を閉じて出てくる人達に目を配った。やっぱり彼女はいない。

彼女と付き合いだしたのは、ほんの四ヶ月ほど前のことだ。今回、男女として付き合いだしてからで言うと、デートも二、三回しかしていない。そのなかに何かしら致命的な失敗でもあったのだろうか。そもそも、彼女との付き合いそのものは長い。高校時代に知り合い、いろいろ合つて社会人になつてすぐに二年ほど付き合つた。お恥ずかしい話であれなんだが、僕は随分前から彼女が気になつていた。別に彼女を悪く言うつもりはないが、もてるタイプではない。それでも高校時代の彼女には彼氏がいて、僕は自分にまるつきり自信がないものだから手を拱いて見ているしかなかった。彼女の友人という座から転がり落ちないようにするので精一杯だったわけだ。

ついでに言えば、僕は自分に自信がなさ過ぎるせいで人との間に壁を作り、その中で一人で暮らすことになれてしまったせいで、我俣に対するセーブが利かなくなっている厄介なタイプだ。この年になつてようやく少しずつだがセーブできるようになつてきたが、それでも油断したり昔のなじみの前に立つとすべてが台無しになる。

まあ、当然昔のなじみの中に彼女も含まれるわけで、僕の性格はよく分かつてくれていると理解していたんだけど。

それはいい、話を戻す。つまり、社会人になつてようやく彼女の周囲が手薄になったというわけだ。それでようやく告白して、お付き合いとなつたわけなんだが、結局上手くいかなくて二年で破局した。向こうが愛想を尽かしたんだ。僕のほうはちつともそんなことなかった。

それでまあ三年ほど待つてもう一度声をかけて、それからしばらくお友達をやつて四ヶ月前に再び告白した、というわけ。どうだ、ややこしいだろう。自慢することじゃないが。さて、何がいけなかったんだろうな。

正直な思いをぶつけすぎて重荷になつたとか。僕も彼女もなかなかのツンデレ気質だから、なかなか面と向かつて「好きだ」とは言えない。言われたら照れるし。それで前回は殆どそういう会話がなかったわけなんだが、今回もそれを繰り返すのは愚考だろうと思ひ、

割と正直に思いをこちらからは投げかけてみたりしていた。それが重かったのかもしれない。事実、彼女からは結構シヨクな言葉をもらった。それは今回の僕のこの実りのない行動にもつながっている。

八時。いまだ発見できず。

缶コーヒ―は三本目。一本来てから次に来るまでの六分の合間にトイレにも行くから結構忙しい。

文庫本はこの時点で半分ぐらいまで読み終えていた。本当に生々しい。心身ともに疲弊している小説の主人公に、なぜか僕は共感していた。

背後にある宝くじ売り場で、最後の呼び込みが始まった。

「残り福、いかがですかー」

たぶんパートなんだろうな。四十絡みのおばちゃんが声を張り上げていた。僕は今年百枚すでに買っているから、これ以上は欲しくない。まあ、百枚買つてりや充分に現実を見据えているよね。ドリムなんて言葉がうそ臭くなる程度には。ただまあ、億なんて金は要らないので、この三百万円ぐらい当たるのにしてくれないかな。まあ、それ以前にあたらないんだけど。こここのところ連続して百枚買い続けているけど、当たった試しもない。

その近くにある駅前のパン屋では、店先に出していたト口箱を店内に回収して閉店の準備を始めている。

じわじわと寒さがしみこんできていた。吐く息の白さも随分と色濃くなった。

すでに靴下に張ったカイロは何の役にも立っておらず、つま先は冷え切っている。缶コーヒ―のぬくもりが逃げてしまふ時間もだんだんと早くなってきた気がする。

本当に、僕は何をやっているんだろう。

行動を起こすきっかけは昨日のことだった。

今年のクリスマスはどっちも平日だから、僕と彼女はその前日の祝日に約束をしていた。プレゼントを買いにいった、食事する。それだけの簡単な約束。それでも、二ヶ月ぶりに会えるはずだったから、僕はわくわくしていた。レストランの予約も済ませていた。

正月も三日なら会えるというので初詣に行こうと約束していた。三が日のうちなら仕事だつて挟まれないから、確実に会えると思っていた。これまでの二ヶ月もチャラに出来るはずだった。

浮かれていたらメールが来た。

二十三日が出勤になったことと、年が明けてからも当分は会えないことが謝罪の言葉とともに書かれていた。

この文面を見たときのショックがお分かりだろうか。まあ別に分かってくれなくてもいい。ただ、僕は果てしなくショックだった。目の前が真っ暗になるという表現がある。ちよつうどそんな状態だった。正直なところ、「終わった」と思った。

けど、僕はどうしてかそのときに強がった。こういう風にしてしまふところが僕の悪いところだ。気長に待つと、なんだかそんな返信をしてしまった。してから後悔した。後悔先に立たずというやつの見本だ。国語辞典にでも掲載してもらいたいほどに。

気長に待つ？

もう充分気長に待っている。おまけに年明けにも会えない。なんで？

もう一度返ってきたメールの最後にはこう書かれていた。

「余裕があればいいんだけどね」

何の余裕なのか。

時間？

それとも心？

どっちにしてもショックだった。

結局僕では彼女の支えにはなれないんだろうか。待つとしていつまで待てばいいんだろう。見当もつかない。せめてメールで話でも出来れば、そう思ってメールの返事はきちんと欲しいという旨のメ

ールを再度送った。返信はなかった。頭にきて、少しなじるようなメールを送った。もうこの時点でちつとも冷静じゃないことは明白だ。僕も一晚寝て、目が覚めて落ち着いたところで初めて気づいた。馬鹿なことをした。

けど、いつまでかわからない間会えない、という宣言は殆どお別れの言葉に近い。どう解釈しようとそのに到達してしまう。また、こんな形で分かれるのかと思うと物凄く嫌だった。僕の招いた部分が大いにあるとはいえ、まるで納得できなかった。とにかく一目会いたかった。会って話したい、と思った。そして今、僕はここに座っている。

十時を回った。もちろんまだ見つからない。

もう帰ってしまったのでは、という思いが胸の中で膨らんでいた。携帯電話をポケットから引っぱり出し、彼女の電話番号にかけた。五度目のコールで出たのは留守電だった。空しくて、何も入れずに僕は電話を切った。

まだ仕事中なんだ。そう思うことで胸の中の疑惑をどうにか押さえつけて僕はここに居続けることにした。

小説の最後のページを読み終えて、僕は文庫本を閉じた。面白かった。幸福は何度でも再生することが出来る、と最後の行に書いてあった。

そうなんだろうか。僕にもそれが出来るんだろうか。この思考の果てには何が待っているんだろうか。

もう、周囲の店はすべてシャッターが下りていた。この本を買った本屋もすでに閉店している。

指先もつま先も限界で、ついでに言えばほっぺたとか鼻先とかも凍りついたように冷たかった。五本目の缶コーヒーを飲み終えたとき、十時台最後の電車がホームに入ってきたアナウンスが流れてきた。

そろそろいるだろうか。幾らなんでももう帰ってくるだろう。そう

いう期待をこめて、よく見知った姿が改札にむけて歩いてくる姿を
思って改札口に視線を走らせる。

いなかった。

やっぱり、彼女はもうとっくに帰宅しているんだろうか。

十一時に入って最初の電車に彼女が乗っていなかったとき、僕は
諦めた。

彼女とは縁がなかったのかもしれない。無理な思いを胸に抱いて
いたのかもしれない。バカバカ、俺のバカ。

いろいろな諦めが束になって襲い掛かってきた。丁度堤防が決壊
して、抑えられていた水の力が解放され、鉄砲水となって全てを押
し流してしまうかのような気分だった。

あっという間に疲弊し、胸糞の悪くなるクリスマスイルミネーシ
ョンの間を抜けて僕は駐車場へと足を運んだ。

「クソツタレ」

なんとなくそう呟いていた。叫ぶ余力が残っていたら、あるいは
そうしていたかもしれない。幸いなことに、僕にはもうそんな気力
はどこにも残されていなかった。

車に乗って、ひたすらに安全運転で僕は家に戻った。アクセルを
踏み込むのも億劫だったからだ。

家に帰ると十二時前だった。すぐに布団に潜り込んだ。目を閉じ
て、とにかく今日を終わらせようとした。疲れきっていたはずなの
に、ちつとも眠れなかった。目を閉じると、彼女が僕の悪口を言っ
ていた。あるいは、他の男と楽しそうに手をつないでいた。

久しぶりに軽く死にたくなった。

なんとなく携帯電話を手を取った。

ディスプレイのデジタル時計は一時になろうとしていた。一時間
も布団の中で悩んでいたのだと知ると、呆れるのも通り越して滑稽
にすら思えてくる。僕の精神は未だに発展途上らしい。もちろん、

悪い意味で。

彼女から来たメールを読み直してみる。別れの言葉なんだろうか。前は半年以上会わないで過ごした挙句、彼女のほうからメールで別れを告げられた。今回もそれと同じパターンになるのだろうか。そう考えている自分がたまたま嫌で吐き気がした。

本当のところを言えば信じたかった。彼女を信じてこのまま待ち続けたかった。それで二月か三月ぐらいに「やっと暇になったよ」なんてメールが届いて、そのまま何事もなくもう一度スタートを切りたかった。

自分がつくづく駄目な人間だと思うのは、こういう瞬間なんだと思う。

信じたい人を信じきれない。

上手くやって行きたいのにやれない。

あるいは、信じようとしないうえ、やろうとしないうえ、と言い換えてもいい。

気がつくとい僕は長いメールを打っていた。

僕の思いを片っ端から打ち込んだ。

彼女のことを好きだということ、三日の約束まで断られたショックが大きかったということ、当分会えなくて、挙句にさよならのメールが来るのではないかと思うと怖いということ。

文章の流れだとか構成だとか、そんなものは一切無視してひたすらに打ち込んだ。

これを受け取ったら、どういう気持ちでいるにしろ引くだろう。

ドン引きするだろう。僕ならこんなメールを貰ったら即刻メルアドを削除する。怖いからだ。

そんな怖いメールを書き上げ、僕は躊躇いなく送信ボタンを押した。ぶっ壊した、と思った。核ミサイルのスイッチを、それも自国に向いている核ミサイルのスイッチを僕は自らの手で押した。

そうして僕は携帯電話を放り出し、シェルターに潜り込むように布団を頭からかぶって目を閉じた。

すぐに眠れた。

翌朝、五時に目が覚めた。四時間しか寝ていないのに、ちっとも眠くなかった。床に転がっていた携帯電話を見たけど返信は無かった。

なぜだか気分はすっきりしていた。あるいは、すっきりしようとか心が頑張ってくれていたのかもしれない。とにかく、昨日のような殺伐とした気持ちにはなっていなかった。全てが徒勞に終わったのが幸いしたのかもしれない、と思った。

再生する幸福は条件がいろいろと難しいらしい。少なくとも、彼女と過ごすという幸福は自らの手でぶち壊しにしまったわけだから。

朝の冷たい空気の中で僕は気がついた。

そういえば、今年はまだコタツを出していないじゃないか。

（後書き）

感想とかありましたら、頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1073j/>

待人

2010年10月8日14時44分発行